＜被表彰者の功績概要＞

（１）教職員

① 樋口　健（玉城町立有田小学校　　教諭）

本県小学校教諭として着任以来、算数科における習熟度別学習の研究に注力し、平成２９年の授業改善研修会において授業を公開し、県内の参観者だけでなく、文部科学省調査官からも高い称賛を得た。

平成３０年は、算数科の習熟度別少人数教育を基本とした学習及び主体的に行動する子どもの育成に取り組み、全国学力・学習状況調査において全国平均を上回る結果となるなど、子どもたちの学力向上につながっている。

また、三重県教育委員会の実践推進校において、自ら進んで授業者となって文部科学省調査官から指導を受けるなど、意欲的な授業改善の取組は地域内教員の範となっている。

② 東出　美帆（伊勢市立有緝小学校　教諭）

本県小学校教諭として着任以来、児童理解に基づく授業実践を重ね、目指す児童像・学校像の実現に邁進してきた。

平成２６年度に特別支援学級児童のコミュニケーション能力を高める授業実践として「みんなで楽しめる収穫祭」を考案し、集団生活において発達段階が異なる児童の成長を促す先進的な取組の事例として市内小中学校の範となった。

現在も特別支援学級の担任として、児童一人ひとりの実態に応じた取組を着実に進めるとともに、市の就学判定委員会の委員として、市の特別支援教育の充実に大きく寄与している。

③ 武笠　主（東員町立城山小学校　教諭）

本県小学校教諭として着任以来、児童理解に基づく授業実践を重ね、教育課題に向き合い、目指す児童像・学校像の実現に邁進している。

平成２８年度に、「論理的に考える国語科授業」の研究を率先して行う中で、授業を公開し、県内教職員に大きな影響を与えた。

平成３０年度は、町教育研究会事務局長として、胎児期から義務教育終了時までに一貫して育むべき力を示した「１６年一貫プラン」の理念を整理し、保育士及び保護者等に発信するなど町の教育充実に貢献している。

現在は、研修のリーダーとして教員の授業力の向上に貢献するとともに、１１月には、大学教授を講師として招聘し、公開授業を実施した。

④ 福岡　順子（伊賀市立城東中学校　指導教諭）

本県中学校教諭として着任以来、音楽科担当として合唱指導に注力し、合唱の技能向上及び集団活動を通じた生徒の心の育成につながる実践を積み上げ、教育課題の克服に尽力した。

また、市教育研究会の中学校音楽部会部長を務め、強いリーダーシップを発揮し、市の音楽教育の発展に寄与した。平成２４年度及び２５年度は、市教育委員会の研究指定を受ける中、研修主任として授業を公開し、参加者から高い評価を得た。

また、コミュニティ・スクール推進の取組として、学校運営協議会と連携しながら、地元の高等学校や一般のバンドとコラボレーションした演奏会を企画運営し、地域住民が学校づくりに参画する体制を構築した。

⑤ 中村　幸治（伊勢市立厚生中学校　教諭）

本県中学校教諭として着任以来、剣道部の顧問として、生徒一人ひとりに寄り添った指

導の実践を重ね、生徒の心と体の育成に貢献してきた。令和元年度の三重県大会では、個人の部において優勝に導くなど、手腕を発揮している。

同人は、一貫して部活動指導を通じた人間形成に取り組み、目標設定及び振り返りを習慣付けた生徒の意欲向上、保護者向けの部活動通信発行などが、生徒や保護者との信頼関係の構築につながっている。

また、限られた時間で集中できるようにポイントを図示したり、ビデオを活用したりするなどの工夫をした指導は、部活動ガイドラインによる適切な部活動運営として、他の教員の範となっている。

⑥　福田　清徳（三重県立松阪商業高等学校　教諭）

本県高等学校教諭として奉職し、現任校において高い専門性を活かし部活動指導に努めている。

特に生徒が活動の主体となることを第一とし、休暇日の保障、学習時間の確保、在校生の状況に柔軟に対応する部活動の在り方を重視しながら、学業と両立できる環境づくりを積極的にすすめてきた。こうした活動を続ける中、全国高等学校ギター・マンドリンフェスティバル「ギター部門」において、７期連続で文部科学大臣賞を受賞させることができた。

また、平成２６年度全国高等学校文化連盟研究大会で文化部指導の成果や課題、組織運営について発表するとともに、近年では生徒の主体性をより一層深める活動に取り組んでいる。

⑦　丹下　浩（三重県立四日市西高等学校　教諭）

平成１６年４月に本県特別支援学校教諭として奉職し、平成１９年に県立高等学校教諭に転任以来、高い専門知識を活かし、本県の理科教育の発展に貢献するとともに、部活動を通して産官学および地域との連携・協働の推進に努めてきた。

特に、現任校における自然研究会の活動において、鈴鹿山麓におけるフクロウの保護活動を実践し、平成 29 年には第 52 回全国野生生物保護実績発表大会で文部科学大臣賞を、平成 30 年には日本鳥学会で高校生最優秀賞の受賞に導いた。

また、地域で啓発活動を実践し、地域の生物多様性保全に取り組む中で、生徒が主体的に考え、社会とつながり貢献する力を育んだ。

⑧　北村　京子（三重県立度会特別支援学校　教諭）

本県特別支援学校教諭として奉職以来、授業における ICT 活用について研究を始め、障がいを持った児童がタブレット端末のスイッチを押すなどの簡単な操作で、主体的な学びを実現させる「ワンタップ教材」を開発し、障がいの種類や実態に応じ、より児童が学びやすいよう改良を重ねてきた。この取組により日本教育情報化振興会主催「ICT 夢コンテスト」での CEC 奨励賞の受賞をはじめ、数々の賞を受賞した。

また、自身が作成したワンタップ教材アプリ「ど～れかな？」をより広く公開し、使用者の意見を反映させ、汎用性の高いアプリにしていくことで、特別支援教育の充実・発展に寄与している。

⑨　伊藤　文貴（高田高等学校　教諭）

総合的な学習の時間の取り組みを中心に、地球温暖化をテーマとして、温室効果ガスである二酸化炭素の学校周辺での濃度調査を基本とした環境学習を行い、「低炭素社会の実現」に向けた探究的な活動を展開し活躍している。

本活動を推進するにあたり、環境省地球環境局、三重県地球温暖化対策室、名古屋産業大学及び地元の企業(赤塚植物園)との産官学連携を通して地球規模の問題に取り組む学習

環境を構築することに尽力した。また、本活動を通じ、ESD(Education for Sustainable Development)「持続可能な開発のための教育」の実践、SDGs(持続可能な開発目標)について、生徒及び教職員に広く浸透させ、本校のユネスコスクール申請に大きく貢献した。更に、同テーマで環境学習を行っている台湾の高等学校とのテレビ会議システムによる学術交流にも積極的に取り組むなど、国際理解教育を総合的な教育活動として取り組みを展開している。

（２）教職員組織

○　松阪市立鎌田中学校、松阪市立第四小学校、松阪市立港小学校

平成２５年度から小中連携型のコミュニティ・スクールを導入し、地域住民等の学校運営への積極的な参画による読み聞かせや補充学習サポート等の取組は、児童生徒の学習意欲の向上、落ち着いた学校生活及び地域を大切にする心の育成につながっている。また、児童生徒が地域住民の温かさや愛情を感じ取ることで、感謝する心や地域に主体的に関わる態度の育成にもつながっている。同コミュニティ・スクールの取組は、平成２６年に三重県教育委員会主催「みえの開かれた学校づくりフォーラム」や文部科学省主催「地域とともにある学校づくり」推進フォーラムで実践発表するなど、県内学校のモデル校として、教育関係者に大きな影響を与えている。こうした中、松阪市立鎌田中学校においては、令和２年３月の新校舎完成に向け、コミュニティ・スクールを活用した議論を重ね、生徒会主体の落成記念式典の準備を進めている。